アジアの医学生、ネパール人助産婦、彼らとの出会いから活動の輪が広がった

神戸大学医学部附属病院母子センター勤務
アジア看護協議会会員
田村康子

助産婦学生だった田村さんは、アジア諸国との交流から国際協力に目覚め、看護の視点での貢献を始めた。

アジア医学生国際会議に出席して

私が国際保健医療協力に興味を深めるきっかけとなったのは、一九八九年に神戸で行われた第一〇回アジア医学生国際会議[1]への参加でした。短大三年生のときです。

将来、海外で活動することを考え、看護の道を選んだものの、日々の実習に追われ、周囲に興味を同じくするものがいない中で、私の夢は自分にとっても遠い存在になりかけていました。

アジア諸国一〇か国の医学生が参加したこの会議では、文化背景の異なる人々との交流が、海外の情報を得ること以上に、自分の物の考え方の枠を取り払う刺激となりました。そして、国際協力に興味をもつ仲間ができたことが何にも増して大きな収穫でした。

この会議は毎年開催されており、九〇年にはインドネシアで行われました。会議のテーマは「Mother and Child Health care」でした。助産婦学生だった私は、夏休みを利用して参加しました。このときはただのオブザーバーだった前年と違い、日本の若年妊娠の現状について仲間とともに発表を行いました。

アジア諸国の間では、戦後日本の母子保健の向上は参考になることも多いと思います。ですが、逆に日本における急激な発展には影の部分もあることを、若年妊娠をテーマに他国の医学生に伝えました。このときの参加は、海外ばかりでなく、国内を見つめる視点をもて、私にとって一歩前進となりました。

アジア看護協議会の仲間たちと

この発表グループの仲間は看護学生や助産婦学生で、現在私が所属しているアジア看護協議会[2]の仲間です。

アジア看護協議会は八九年に、看護系学生が中心となりできた団体で、看護の視点で国際保健医療に貢献することをめざしています。

アジア医師連絡協議会[3]と友好関係にあったので、神戸の会議でできたネットワークをきっかけに知り合うことができました。学校も住んでいる所も違うけれど、国際協力と看護の二つのキーワードでつながる仲間がこの頃から少しずつできはじめてきました。そして近くにいる仲間と定期的に集まって学習会を行うようになりました。

最初は海外に旅行した友人から話を聞いて、疑問点を次の集まりまでにレポートしてきたり（たとえば、タイの小乗仏教について・スラムについて・売春の現状についてなど）、ユニセフのライブラリーから無料のビデオを借りてきて、それをもとにディスカッションをしたりしました。そのうちに学習会だけではなく、国際協力経験のある方を講師に招いて交流会を行ったりもしました。

ANSAネパールのバクタプルでの妊婦検診クリニックで

ネパール人助産婦との出会い

私は九一年から病院に勤務していますが、この年の夏休みを利用してネパールへ行きました。このときはアジア医師連絡協議会のネパール支部が行っている巡回診療プロジェクトの見学が目的でした。それがきっかけで病院見学をして、ネパール人の看護婦の知り合いができました。

彼女は貧しい地域の住民に対する何らかの

病院のまわりにはいつも人が
いっぱい集まって診察を待っている

アプローチに興味をもっており、アジア看護協議会にも関心を示しました。次の日には五人の仲間を集めて、自分の興味をこの会の活動として展開したいと言ってきました。

九二年の夏休みに再度、ネパールに行くとメンバーが五人から二五人に増えていました。彼女たちは月に二回、バクタプルという貧しい都市で巡回妊婦検診を行っていました。半年間の活動中にIUFD（子宮内胎児死亡）を発見したりと、地域に貢献していました。

ネパールでは古くからの慣習が強く、妊婦よりも夫や姑の意見が強いそうです。だから保健指導をするにしても、家族ぐるみに働きかけていくことが大切だそうです。

ネパール人助産婦と話をしていたとき、外国人ではなく、（自国の）文化的背景をともにする者だからこそ行えるきめの細かいケアを肌で感じ、海外で働くことに何の疑問ももたなかった自分に気づきました。

何のためにあえて自分が海外で保健医療活動をしようとするのかを考えたときに、感覚的な捉え方ではただの自己満足に終わるのではないか。かといってすぐに答えは出るものではなく、疑問形のままになっています。

この二回目のネパール訪問時には、ブータン人難民キャンプも見学してきました。往復三八時間もバス移動にかかったので、滞在期間に限界があり、参加はできませんでしたが、現地のNGOのスタッフと話をしたり、キャンプの子どもたちと歌ったりして意味のある見学ができました。

余談ですが、ガードレールも何もなく、すぐ下には何十メートルもの渓谷や急流が待ちかまえている中を猛スピードで飛ばすバスはさすがに恐かったです。雨期だったので実際崖崩れもあり、バスが谷底に落ちたというニュースも二、三聞きました。移動も命懸けです。このような地理的条件もネパールの貧しさに影響していることを身をもって経験できました。

今年はネパールでフィールドスタディを

この二回のネパール訪問でできたネットワークを利用して、今年の夏にはフィールドスタディ（86ページ参照）を行う予定です。

周産期のネパール人女性を対象として聞き取り調査をして、文化の違いや問題点を探り、何ができるのかを考える予定です。

看護過程を組み入れ、国際保健医療協力を考える機会になればいいと思っています。同時に、興味をもちながらも一歩踏みだせないでいる人の足がかり的な体験の場となればとも思っています。情報収集の方法としては看護診断でも用いられているゴードンの一一の健康機能的パターンを使い、理解を深めたいと思っています。

現在行っている活動としては、他に在日外国人の周産期の問題を調査しています。試行錯誤ですが、これを機に何か国内でもケアできたらいいのにと考えています。

この数年、看護婦の置かれている立場が注目されています。国際保健医療協力分野においても、看護職者の環境はよいとは言えないようです。病院を退職しなければ協力に行けない。帰ってもその経験は評価されない、経験を生かす場もあまりない、等です。

ありのままの対象を受け入れ、その中で自然治癒力を高めたり、潜在的な能力を引き出したりするケア的アプローチは看護そのもので、医療協力をする際も必要だと思います。

国際保健医療協力を考えると、看護とは何だろう、何ができるのだろうと考えずにはいられないことに気づきます。もっと身近な存在になるように何ができるのかを考えることも、間接的かもしれませんが、国内にいてできることだと思います。

こうして自分の活動を振り返ってみると、「人の輪」がすべてのきっかけだと思います。自分のネットワークを拡げ、さまざまな人の考えを知り、意見交換していくことが自分の考えを整理することになり、第一歩になります。そのためにも興味をもっている人は、自分一人でその夢を温めるのではなく、仲間をつくって夢を発展させてほしいと思います。

用語の解説

(1) アジア医学生国際会議
1979年に発足。アジアを中心に広く世界の医療事情と医療に関心をもつ医学生の学習・調査・交流の国際会議

(2) アジア看護協議会
1989年に発足。看護婦や保健婦、助産婦、学生を中心に看護の視点で国際交流をめざす。詳細は80ページ参照

(3) アジア医師連絡協議会
1979年に発足。医療を通じてアジア人と連帯しようという民間団体。医師、看護婦など参加。詳細は80ページ参照